

佳作

父親という存在の大きさ

香川県 香川県立高松工芸高等学校二年 石田 一馬

未っ子の僕は、小さい頃から兄が進む道をいつも追いかけるように過ごした。習い事も部活動も自分の意志ではなく、兄がやっていて両親も勧めてきて仕方なくやってきた。

しかし、中学三年の時バレーボールを続けるかどうかで悩んでいる時、兄が続けていたので続けなければいけないと思っていたが、両親に続けたくないことを伝えた。両親は許してくれた。その時、両親は僕の意志を受けとめてくれた。特に、父が心の中では僕にバレーボールを続けてほしかったので、僕に続けたくないときいてから何度も

「本当にやめていいのか。」と聞いていた。そう悩んでいる時に高校からバレーボール推薦がきたときに父が心の中の思いを僕に伝えてきた。「バレーがまだ好きで続けるか悩んでいるなら父さんおまえがバレーで活躍しているところを少しでも長く見たいから続けてほしい。」

車の中の状況のおかしさにすぐに気づいた。おかしいことは二つあった。一つ目は、いつもなら運転席に父がいて助手席に母がいたのだが、その日は父の姿はなく、泣きながら母が運転していた。兄と目を合わせお互い不安な目で車に向かった。後から聞いたのだが、兄は祖母に何かあり、父が付き添っており、母が迎えにきたと思っていたそうだ。しかし僕は、父に何かあったことを感じていた。なぜなら、母と祖母はすごく仲が悪いから母はそこまで泣くとは思えなかったからだ。兄と車に乗った時、母から衝撃すぎることを言われた。

「まだお母さんも受け止めきれないし、嘘にしか聞こえないと思うけど、本当の話だから冷静に聞いて、父さんが亡くなった。」

二人は驚く前に信じられなかった。信じていない二人だがなぜか涙を流している。兄の二日後の大会のこともあり、母は兄をつれて顧問の先生のところへ行った。僕は一人で車に残された。僕は一人で落ちつけずとにかく泣いた。母と兄が戻ってくると、僕は泣かなかった。みんなつらいから自分だけ泣くわけにはいかなかったからだ。

それから家庭でいろいろありながらも、兄の最後の大会がきた。兄はすごい声援をうけて何もなかったかのよう完璧なプレーをした。母も父のことで大会に来れなかったが、兄はずっとチームが苦しい時も笑顔でプレーをやりきった。いつも父は

と言われ、僕の意志は変わった。父の影響で高校も兄と同じ高校に進んだ。少しでも早く父のためにレギュラーに入って試合に出れるように毎日頑張った。いつも笑顔で部活終わりに

「今日はどうだったんや。」

と悩みなどがなく優しく聞いてくれた。入学して半年で自分も試合に出られるチャンスがあったが、レギュラーをとれず父に試合に出る姿はその大会では見せられなかった。父は大会終わりに

「次は出れるように頑張れよ。」

と言ってくれる。僕自身も悔しさいっぱいになり練習に励んだ。兄もレギュラーをとり最後の大会で活躍できるように頑張っていた。

兄の最後の大会二日前の日、なぜだか兄も僕もバレーボールをいつもどおりしているだけなのに、とてもいつも見せないくらい強くておどろいた。気持ちよくその日の部活を終え、予定通り友達と遊ぶために連絡をとろうと思いい、スマホを開いた。すると、いつも仕事をしていて連絡などない母から何度も着信があり、一件のメッセージが届いていた。「すぐ遊ばずに帰らないといけなかった」と送られていた。何があったのか知らない僕と兄は遊びたくてイライラしながらも、友達に断りをいれて母の迎えを待った。心の中ではイライラもあるが、急すぎる母からの連絡に不安を抱いていた。迎えが来た時、

「バレーを楽しんでやれ！」

と言っていたから、兄はそれを胸に頑張ったのだ。兄は本当に強くカッコいい人だった。試合が終わった瞬間に兄は号泣していた。そのそばですっと泣きながら泣いたのは兄に何があったのかを一番分かってくれていた幼馴染の友達だった、お互いつらいのだが、一番兄がつらいのを分かっているから泣きながらもずっと兄の背中をさすってくれていた。その姿を見て僕は応援席で涙が止まらなかった。

大会の全てを終え、母のところへ帰った。母はすでに兄の活躍ぶりや僕の応援の頑張りを友達から聞いていた。母は父の分まで僕たちを抱きしめてくれた。

結局、父は僕が大会に出る姿を見られなかった。父を亡くしてから僕は情緒不安定でいろいろ悩んだ。バレーボールをやめようとしたけど、父が僕のバレーボールを頑張っている姿をどこかで見てくれてる気がしてやめるわけにはいかなかった。

この経験から、たくさんの人に知ってほしいことがある。人はいつ何があるか分からないから自分を支えてくれる人に感謝の気持ちを持つだけでなく伝えてほしい。自分がいついなくなっても悔いがないよう毎日を大切に過ごしてほしい。